

# 多文化共生と心理臨床

## ③差別するところ

ガヴィニオ 重利子

「オバマが良い・・・」

学校のお泊まり遠足からの帰り道、バスの中で息子が私につぶやいた。彼の遠足中にアメリカで大統領選挙があり、トランプが次期大統領に当選したのだった。お泊まりした合宿場にテレビはなかったはずだし、第一、息子がアメリカ大統領選について知っているなどとは思えず、私はびっくりした。

「誰から聞いたの？」と尋ねると、「みんなしゃべってたよ。怖いって」と息子は話してくれた。きっと先生たちから始まり、ショックの波が子どもたちにも空気として伝わったのではないかと思われた。私自身、朝一番に届いたそのニュースに久々に頭が真っ白になるような驚きを感じたし、その状況は想像するに難くなかった。そして次の週には、新聞にも今回の選挙結果に子どもたちが受けたショックについて、意見コラムなどが出ているのを見かけた。移民の親や親戚を持つ子どもたちの間では特に、将来への不安から眠れない、食欲がないなどの身体症状を訴える子も出てきているらしく、事態はなかなか深刻らしかった。

どうしてこうもトランプ現象は米国の政治という枠を超えて世界中に旋風を巻き起こしたのだろうか。何と言っても、彼の人種差別的、宗教差別的、性差別的発言の数々は、世界中で多くの人を傷つけたり怒らせたりした。英国の心理関連雑誌などでも「選挙期間中、クライアントの多くが面接室でトランプの話をするようになった」ことが取り上げられていた。それだけ多くの人へ、とりわけこころに繊細な課題や不安定さを抱える人たちへの影響は大きかったようだ。

差別を社会環境や無知からくる人の未熟さとして議論することは、簡単なことのように思う。確かに、今回の選挙結果や人種差別に関連する調査結果が示すには、差別が起こりやすいのは同じ国内でも経済的に貧しく、外国人が少ない地域に多いということがある。しかし、問題はそれだけなのだろうか。都市部に暮らし、一定の教育を受けた「私たち」とは、差別は無関係なのだろうか。

最近、精神分析家 Narendra Kevall の *Racist States of Mind* という本を読んだ。差別とは、「こころの状態の一つ *states of mind*」というタイトルに惹かれた。それは社会や政治的な問題といった遠い存在ではなく、私たち一人一人が日々体験するこころの状態だということがこの本の主題だった。

「人は、受け入れ難い自分の弱みや辛さを相手に移し見ることで、そのことを考える責任から情緒的な距離をとることができる。しかし、そのような擦りつけを受けた相手は、自分ではないものを押し付けられることになり、アイデンティティーを傷つけられることになる」といった精神分析では投影と呼ばれる概念がこの本の軸となっていた。

学校でのいじめや児童虐待などでも、きっと同じことが起こっているのだろうと思う。それらの問題も常に、地域環境や家庭環境の厳しいところで深刻化しやすいし、加害者となる親や生徒自身が大変辛い境遇に暮らしていることが多いという現実はもっと注目されるべきことのように思う。人はしんどくなると、その辛さを肩代わりしてくれる人(自分より弱く見える人)を見つけ、擦りつけることでなんとか情緒的距離を取り、生き抜こうとするのかもしれない。

先月、こちらの州立大学が主催する児童虐待に関する研修会に参加してみた。そこでは、この国のいじめに関する興味深い調査結果も提示されていた。20年近くの追跡調査を経て、いじめが子どもたちの「その後」に及ぼす影響が調べられた研究だった。被害者が5年後、10年後にも抑うつなどの症状を抱えやすいという結果だけでなく、加害者や目撃者にもその影響が残ることがわかったとのこと。つまり被害者と加害者、そして目撃者もまた、心に傷を負うという結果だった。擦りつける方も、擦りつけられる方も、そしてまたそれを見る人間にとっても、それは辛い体験となるようだった。

「オバマが良い」とつぶやいた息子は、確かにどこか辛そうだった。テレビで流される発言の数々に傷つく大人たちの姿。それを見ている子どもたちもきっとその体験に傷ついたのかもしれない。また、自分自身が移民(少数派)となった息子にとっては、その痛みは同時に決して他人事ではなかったのだろう。

日本でも、障害者施設での殺人事件やその後の犯人による「障害者はいらない」発言、そして沖縄での「土人」発言問題など、差別的な出来事が続いている。と同時に、「美しい国、日本」や「日本人のここがすごい」といった歯の浮くような文句も、もてはやされる傾向にあるように感じる。これらはきっと、同じコインの裏表なのだろう。自分の内に存在するブサイクさを省みなくなる時、痛みに耐え難くなる時、それらは他者に居場所を見出すことになる。

**Make America Great Again!** (アメリカに昔のような栄光を!) とはトランプの有名な掛け声だが、擦りつけは、人種間、民族間、国家間だけでなく、昔と今といったあらゆる違いを見つけては起こるのかもしれない。「昔はもっと〇〇だった」とか「最近の若いもんは」といったセリフも、その人にとって「今が辛い」ということときっと同義なのだろう。そろそろ私も若者ではなくなってきたこの頃。若いもんに擦りつけることのないよう、自省に励んでいきたい……(汗)。

参考文献 : Keval, Narendra (2016), *Racist states of mind –Understanding the perversion of curiosity and concern*, London: Karnac.